

光学赤外線天文連絡会による「国立天文台・岡山天体物理観測所運用方針」についての議論の報告

2010年11月2日 国立天文台・光赤外専門委員会提出資料②-1
光学赤外線天文連絡会・運営委員長 山田亨（東北大学）

2010年度当初より、国立天文台・台長から、岡山天体物理観測所（以下、岡山観測所）の将来の運用方針についての表明があり、これに対して、光赤外線天文連絡会（以下、光赤天連）では、これまで岡山観測所における共同利用観測を行ってきた大学・および研究機関などのいわゆる岡山ユーザを含む、日本の光学観測の研究者の立場からこの問題についての議論を行った。ただし議論は、岡山ユーザに閉じたものではなく、日本の光赤外天文学研究全般を含むできるだけ広い範囲の研究者の参加によって行われたものであることも、念のため付記しておく。

経緯：

光赤天連では、当初よりこの問題に関心を持ち、2010年8月18日に開催された「光赤天連シンポジウム」において議論を行った。さらに、8月20日に行われた国立天文台光赤外委員会での議論と、これをうけてとりまとめられた同委員会の提言案（委員長案、審議中）を含め、9月6日に、台長提案の方針を含むこれまでの経緯の紹介とともに、議論を喚起する内容の報告を光赤天連メーリングリストにより回覧した。同時に、電子メールによる個別の意見の募集も開始した。次に、金沢大学において行われた日本天文学会秋季年会会場に於いて、光赤天連が主催する「岡山観測所運用方針についての懇談会」（9月22日 出席者：約50名）および「光赤天連総会」（9月24日：出席者57名）をひらいてこの問題についての幅広い議論を行った。懇談会議事録は、光赤天連委員会資料として別途提出する。光赤天連総会では、シンポジウム、メールでの個別意見、懇談会での議論を踏まえ、運営委員長から以下の骨子に沿った光赤天連の意見表明案を紹介し、議論を行った。同意見表明案は、9月30日付けの電子メールにて光赤天連会員にも速やかに回覧され、意見の募集を行った。これについて、これまでのところ大きな異論はなく、光赤天連に所属する研究者の意見分布として、以下の内容を光赤外線専門委員会に報告する。

光赤天連における議論のまとめ：

（注）以下、議論を整理するため地上観測施設にのみ限った議論を行い、スペース計画についての議論、および、地上・スペースを含む全体的描像についての議論は含んでいない。

1. 光赤外観測分野における岡山観測所将来方針の位置づけについて

- 国立天文台では、大学だけでは実現できない先端的な共同利用研究開発を最優先課題として進めるべきである。具体的な例としては、TMT計画の推進、すばる望遠鏡の有効的・戦略的利用の推進が考えられる。
- 同時に、国立天文台では大学共同利用機関として、大学とともに、天文学全体の拡充につながる教育・基礎的な研究開発のための基盤形成を担うべきである。具体的な活動目標として、大学間連携支援（大学望遠鏡の活用）と、中小口径望遠鏡共同利用施設の充実があげられる。岡山観測所の将来的な運用方針は、これらの観点からも議論され、その有効活用を行う方針を策定すべきである。

2. 教育・基礎的な研究開発のための基盤形成について

上記「1」の第2番目の項目に関して、光赤外コミュニティとして次のような方向を目指すべきである。

- **各大学の望遠鏡・装置の特色を生かした研究・教育の推進をはかる。**

すでに現在、複数の大学で稼働している1m級の望遠鏡や、観測最適地に設置され、研究・教育上の明確な目的を持った望遠鏡の運用が進められているが、今後さらに、これらに続く、各大学・機関における教育や特色ある研究を目指す望遠鏡・装置の充実が期待される。現時点で明確な具体的計画は（稼働中のものを除いて）特定できないが、将来の展望として、晴天率、アクセス、インフラストラクチャーなどの観点から、岡山観測所サイトの潜在的な重要性は大きいと考えられる。

● **望遠鏡を持たない大学における教育、基礎研究・開発の充実をはかる。**

一方、大学、研究室には独自の望遠鏡を持たない（あるいは、持つことの難しい）研究グループも多いが、共同利用の本来の趣旨でもある汎用望遠鏡による教育、基礎研究・開発の充実も必要であり、そのためには安定して使用可能な中小口径望遠鏡の共同利用の存在は必須である。この点に関しては、現在の岡山 188cm 望遠鏡による共同利用が、円滑に、また、大きな空白を生じることなく、京都大学 3.8m 望遠鏡を利用した国立天文台などによる共同利用へと継続されることが必要である。188cm 望遠鏡については、一般的な共同利用の終了に伴い、直ちに運用を停止するのではなく、より目的を特化した研究を、研究者グループの努力、および国立天文台のサポートにより可能な限り継続すべきである。

3. 岡山観測所の将来の運用方針について

● **188cm 共同利用の停止と、その後も含めた岡山サイトの維持。**

既存のインフラストラクチャーを利用し、大学等における観測天文学の「教育」および「基礎的」「萌芽的」「長期的」な研究を可能とする共同利用施設として国立天文台として可能な限り維持するべきである。

● **188cm 望遠鏡共同利用。**

188cm 望遠鏡の共同利用に関しては、京都大学 3.8m 望遠鏡が安定して稼働する段階で、当初利用可能な装置をもってこれを用いた国立天文台による共同利用観測に移行することは妥当である。一方、3.8m 有効利用のための観測装置の開発を大学・ユーザ研究者の主体的努力と国立天文台の支援により策定し、実現のための努力を行うべきである。

また、27年度以降についても、維持可能な限り 188cm によるサイエンス観測を行いたい。その場合、中心となる観測グループによる競争的資金の獲得など、自主的な努力が必要となることが想定されるが、一方で、国立天文台としても、「廃止ありき」ではなく可能な限りサイエンス観測存続の手段を講じて欲しい。

これらの観点に基づいて、光赤天連として、光赤外専門委員会による9月1日付け答申案（委員長案）を支持する。

以上。